OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「揚州夢」をめぐって
Author(s)	陳, 文輝
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2008, 42, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5497
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「揚州夢」をめぐって

陳　　文輝

はじめに

中国の小説や戯曲には、筋の運びや登場人物など、物語に必要なさまざまな要素を類型化しようとする強いはたらきがある。たとえば演劇に用いられる「脚色」は、物語の内容とは無関係に人物を主人公・悪役・道化・老け役・子役等の類型に分け、それぞれの所作ごとまで定めてあらゆる演目に対応させようとするものといっていい。また、こうして登場するさまざまな「脚色」は、たとえ演目が異なっていても同じ性格をもち、登場人物に似たようなセリフを口にさせる。中国の小説や戯曲が持つこうした「類型化」の傾向は、単に登場人物だけではなく物語そのものにも及ぶ。たとえば、田中謙二氏は「元人の恋愛劇における二つの流れ」（『田中謙二著作集』第一巻 汲古書院 2000年）という論考の中で、中国の恋愛劇が「書生と良家の娘の恋愛」と「書生と妓女の恋愛」との二つの系譜に分類できることと、そして才子佳人を扱う『西廂記』と妓女を扱う『販茶船』とがそれぞれ多くの類似作を生み出したことを指摘している。その上で氏は、また次のように述べる。

> 元劇を知らぬ読者は、ここに挙げた数種の作があまりに類似していることに驚かれるであろう。しかし、元劇では単に恋愛劇のみでなく、あらゆる部類に於て、またあらゆる戯劇技巧に於て、多くの類似型が指摘される。それは元劇のもつ形態上の制約および戯劇評価の焦点が曲辞にあったことに起因する。すなわち、元劇が通常四つの折（幕に

あたる）から成り、歌者が四折を通じて一人に限定されていたことが、筋の複雑化を避ける傾向に導いた。

恋愛を扱う中国の小説や戯曲は「書生と良家の娘の恋愛」と「書生と妓女の恋愛」の二つの類型に大別されることになるが、その類型の中で「似たような展開」の作品が次々に生み出されていったのは、氏の指摘通り、小説や戯曲を評価する基準が必ずしもストーリー展開の善し悪しにあるわけではなかったためだろう。特に元雑劇は「一人独唱」という大きな制約があったため、作劇・観劇の興味は主人公の心理に集中しがちであった。「似たような物語展開」ないし「安定した背景」のなかで、各主人公の心理の襞が展開され、歌辞の優劣が競われることになったのである。

しかし、そうした元雑劇の傾向の中で、物語展開にさまざまな工夫を凝らすことを元曲の大作家たちが全く行わなかったかといえば、実はそうではない。元雑劇には、中国の小説や戯曲の多くが「物語類型」に安住する傾向をもつ中で、積極的に「類型」を破壊しようと、「類型」をパロディー化した作品も少なからず見られる。

本稿は、元雑劇の妓女物語の中で後期を代表する喬吉の作「揚州夢」を中心に、元雑劇が「物語類型」をいかに変形しパロディー化したかについて考察するものである。

「揚州夢」の変形

作品の分析に入る前に、作者の喬吉について簡単に触れておきたい。元・鍾嗣成が編纂した『錄鬼簿』の天一閣本には以下のようにある。

> 喬夢符、名は吉。太原の人。笙鶴翁と號す、又た惺惺道人と號す。美容儀にして辭章を能くす。威嚴を以て自から飭(つつ)しみ、人は敬して之

> を畏る。杭州の太乙宮前に居る。「西湖に題す梧葉兒」百首有り、名公之が爲めに序をなす。江湖の間に四十年、作る所を刊せんと欲するも、竟に事を成す者無し。至正五年二月、病みて家に卒す。『天風環佩』『撫掌』文集有り。

彼の文集と見られる『天風環佩』『撫掌』は既に散佚して、目にすることができない。彼の元曲作品は十一篇あったといわれるが、残念ながら今日まで残るのは「金銭記」「揚州夢」「両世姻縁」の三つだけである。

「揚州夢」は『改定元賢伝奇』[1]『古名家雑劇』『継志斎元明雑劇』『元曲選』などにテキストを残しているが、本稿における引用は、現存最古の刊本で最も原形に近いとされる明・李開先編『改定元賢伝奇』に依拠した。李開先は喬吉の作品を愛し、喬吉の小令を収集して刊行もしている[2]。刊行した小令集の序の中で、李開先は喬吉について次のように述べる。

> 元は詞名を以て代う、而して喬夢符は其の翹楚なり。……予を以て之を論ずれば、蘊籍包含、風流調笑、種種に奇を出して之を怪に失せず、多多益す善くして之を繁に失せず、句句に俗を用いて其の文たるを失せざるなり。

明代の文人たちは総じて喬吉を愛好した向きがあるが、それは恐らく李開先にはじまる。李開先は喬吉の作品の中に、明末の文人伝奇が求めたのと同様の「奇」と「文」を見たのであろう。

では、「揚州夢」の梗概を紹介する。

> 豫章の太守張尚之は、豫章での公務を終えた翰林侍読杜牧のために送別の宴席を用意する。その宴席で、杜牧は張府の十三歳の歌妓・張好好と出会い、彼女に瑞文錦と犀角櫛を贈る（楔子）。三年後、同じく

公務で揚州を訪れた杜牧は揚州の太守牛僧儒に招待されるが、その宴席で歌妓・張好好と再会する。杜牧は、眼の前の美女が三年前の張好好であることを悟らず、彼女に思いを寄せる。太守牛僧儒は杜牧の心を見抜いたものの、廓に留恋する彼の生活を嫌って、故意に二人を遠ざける（第一折）。翌日、張好好をひと目みんと杜牧は再び太守府を訪れようとする。だが、彼の意図を察知した太守は事前に酒席を翠雲楼に用意する。杜牧はそちらにまわされ、気晴らしの酒を飲んで居眠りする。夢の中で杜牧は張好好と楽しいひとときを過ごすが、日が暮れて夢から覚め、彼女への思慕をます（第二折）。杜牧が張好好に会うのを諦めて帰京しようとする。そのとき、揚州の富人白文礼が送別の宴席を用意する。宴席で、杜牧は太守牛僧儒宅の美女が三年前の張好好であることを知ると、彼女と結婚したい一心で、白文礼に仲人を頼み、帰京して知らせを待つことにする（第三折）。それから三年後、杜牧は相変わらずの廓遊びをつづける。任期を終えた牛僧儒は帰京して杜牧を訪れるが、張好好のことで恨む杜牧は会おうとしない。揚州の白文礼が仲を取り持ち、宴席を開く。杜牧は張好好と結婚することをついに許される。このとき廓に留恋する杜牧の素行が皇帝に知られ、あやうく流罪となるところを豫章太守張尚之に救われ事なきを得る。杜牧は、張好好との結婚をきっかけに、遊冶郎の生活にケリを付ける（第四折）。

「揚州夢」は、『元明北雑劇総目考略』等先人の考証がすでに指摘するように、「張好好詩」という杜牧自身の作品をその本事にもつ。『樊川文集』巻一「張好好詩」の序文は次のようにいう。

牧、太和三年、故吏部沈公の江西の幕に佐たり。好好、年十三。始め

> は歌を善くするを以て來たりて樂籍中にあり。後一歳、公、移りて宣城に鎮す。復た好好を宣城の籍中に置く。後二歳、沈著作述師の爲に雙鬟を以て之を納む。後二歳、洛陽東城に於て重ねて好好に覩(あ)う。舊に感じ懷(むね)を傷み、故に詩を題して之に贈る。

この詩序によれば、張好好は楽籍の人すなわち妓女であり、十三歳にして杜牧とはじめて出会った。翌年、宣城に妓籍を移し、さらに二年後、著作郎の沈述師なる人物に落籍され、その「雙鬟」となった。以来、杜牧と張好好は顔を会わせることがなかったのだろうが、さらに二年後、二人が初めて出会ってから五年の後に今度は洛陽東城で再会したのである。そのときの感慨を「張好好詩」は次のように歌う。

> 洛城重相見、婥婥爲當壚。怪我苦何事、少年垂白鬚。朋游今在否、落拓更能無。門館慟哭後、水雲秋景初。斜日掛衰柳、涼風生座隅。灑盡滿襟淚、短歌聊一書。
> 洛城に重ねて相い見みゆれば。婥婥として當壚と為る。我の何事に苦しみて、少年にして白鬚を垂るるかと怪(あや)しむ。朋游は今は在りや否や、落拓して更に能く無からんや。門館　慟哭するの後、水雲　秋景の初。斜日は衰柳に掛り、涼風は座隅に生ず。灑(そそ)ぎ盡くす滿襟の淚、短歌を聊(いささ)か一たび書せり。

ここに見える「爲當壚」という言葉から、張好好は沈述師の「雙鬟」から流転を重ねて洛陽の歌妓になっていたことがわかる。また、「怪我苦何事、少年垂白鬚」という内容からすれば、「落拓」を託つのは妓女のみではなかった。むかし知り合いだった妓女との偶然の邂逅、主人に寵愛された華やかな過去の思い出と現在の不遇、そうした感情が作者杜牧の境涯と結びついて「張好好詩」は書かれているのである。この詩の主題が、もちろん杜牧

と張好好の恋愛感情にないことは言うまでもない。

喬吉の「揚州夢」は、この本事を用いつつ、張好好と杜牧の流転をすべて「恋の成就を演出する障害」に変え、杜牧の有名な「題揚州（揚州に題す）」詩をさらに重ね合わせ、首尾一貫したひとつの物語に作り変えたものに他ならない。杜牧の「題揚州」詩は次のように歌われる。

> 落托江南載酒行。楚腰纖細掌中輕。十年一覺揚州夢、贏得青樓薄倖名。
> 江南に落托して酒を載せて行く。楚腰纖細にして掌中に輕し。十年一覺揚州の夢、贏ち得たり青樓薄倖の名。（『才調集』巻四）

現実の杜牧と張好好は、初めて出会ってから五・六年後に洛陽東城で再会する。この事実と「十年一覺揚州夢、贏得青樓薄倖名」をうまく結びつけ、喬吉は、「十三歳のときに一度会い、その三年後にもう一度出会っただけの妓女と書生が、さらに三年後に結婚し、その結果、書生が廓遊びから足を洗う」という物語を作り上げたのである。「揚州夢」の最終幕において杜牧が突然廓から足を洗うのは「十年一覺揚州夢」の一句を踏まえており、またこの句に因んで本劇の題目正名も「杜牧之詩酒揚州夢」という。

だが、ここで更に注目しなければならないのは、本劇の主題がどこにあったかという問題である。「張好好詩」と「十年一覺揚州夢」の句とを結びつけて別の物語を作るだけであれば、喬吉の前には模範となるさまざまな先例があった。歴史上有名な文人の恋を描くのであれば司馬相如の例があるし、たとえば元雑劇の大家馬致遠には、「琵琶行」という有名な作品を利用して白居易と妓女の恋愛を描いた「青衫淚」[3]という芝居がすでに存在していたのである。「琵琶行」は白居易と妓女の恋愛を描いた作品ではない。しかし「琵琶行」には「同是天涯淪落人」という一句があって、杜牧「張好好詩」と類似した観点から発想された詩である。馬致遠はこの「琵琶行」を使って「書生と妓女の恋愛」と瓜二つの作品「青衫淚」を作

り上げた。したがって喬吉も、「張好好詩」と「十年一覺揚州夢」の句を用いてこれにそっくりの話を作ることは可能だったはずである。にもかかわらず喬吉がそうしなかったのは、「書生と妓女の恋愛」では描ききれない主題が彼の中にあったからであろう。

「揚州夢」が「妓女物語」の中で特異なのは、これが「末本」であることである。この作品は「妓女物語」でありながら妓女は描かない。妓女に着目せず、ただ「書生」ばかりを描く。しかも、主人公杜牧は出世を願う「貧乏書生」ではない。登場した時点ですでに「翰林侍読」の肩書きをもつ地位の高い官僚であるにもかかわらず、その志は方外にある。

本劇の第一折で、杜牧は先ず次のように歌う。

【油葫蘆】月底籠燈花下游。閑將佳興酬。綺羅叢封我做醉鄉侯。酌幾杯錦橙漿[4] 洗淨談天口。折一枝碧桃春占定拿雲手。打迭起翰林中猛性子挺、拽扎起太學内體様兒傲[5]。趁著這錦封未剖香先透[6]。渴時節吸盡洞庭秋。

【天下樂】端的是一醉能消萬古愁。醒來時三杯扶起頭。我向那紅裙隊裏奪了一籌。看花呵致成症候。飲酒呵灌的醉休。我則待勝簪花常帶酒[7]。

【油葫蘆】月下に燈籠をともし花のもとに遊ぶは、この佳興に乗じんがため。美しい着物の華やかな人々が私を酔郷の王侯に封じてくれよう。数杯の錦橙漿を酌んで天をも談じるこの口のけがれを洗い流し、一枝の碧桃を手折って雲をもつかむこの手をいっぱいにしよう。翰林（学士院）における私の荒々しい気性はどこかにしまいこみ、太学における見栄や体面は押さえつけておこう。錦の封印を透して香り来るこの酒の美味なるに乗じ、洞庭湖ほどの量を飲んで喉の渇きを癒しましょう。

【天下楽】まこと、ひとたび酔えば万古の愁いも消えるというもの。

目が覚め三杯もあおれば、二日酔いはどこへやら。私は、あの紅の衣の妓女たちの一番の人気者。花を見るなら恋やまいにならずんば気が済まぬ。酒を飲むなら酔わずんば気が済まぬ。ほろ酔い加減で花かんざしと洒落込みたいもの。

ここにいう「拿雲手」は、「天下をつかむほどの手」の意、「談天口」は「天下国家を論じる口」の意。また「打迭起」は「收拾」、「拽扎起」は「束縛」の意である。本劇における杜牧は高い志をもち、胸に「万古の愁い」をいだく。だが、「官場」に身を置いて志を得ず、「翰林における荒々しい気性をしまいこみ、太学における見栄や体面は押さえつけて」、花と酒に溺れているのである。

「揚州夢」における杜牧のこの人物像は一貫したものであり、たとえば最終幕の第四折でも、彼は次のような歌辞を展開する。

【沉醉東風】休想道惟吾獨醒屈平。則待學衆人皆醉劉伶。澆消了湖海愁、洗滌了風雲興。怕孤負月朗風清。因此上落魄江湖載酒行。糊塗了黃粱夢境。

【沉醉東風】ひとり世から醒めている屈原のような人間だと私のことを思うでない。人びとと一緒に酔い痴れる劉伶のまねを私とてしたいもの。酒を注いで海のように深い愁いを消してしまい、天下風雲の思いを洗い流す。美しい花・美しい風にそむいてはならぬ。この故に江湖に落魄して酒を載せて行き、世俗の「黄粱の夢」など知るものか。

ここに描かれるのも、高い志をもちながら韜晦して酒色に耽る文人の姿であろう。

だが、本劇における杜牧が「韜晦によって酒色に耽っている」のであれば、最終幕で張好好と団円した後、「子弟収心」[8]して廓遊びから足を洗っ

てしまうのは、物語展開の上で大きな矛盾を生むことになる。なぜなら、右の【沉醉東風】でも「澆消了湖海愁、洗滌了風雲興。怕辜負月朗風清。因此上落魄江湖載酒行」と述べているように、杜牧の廓遊びの原因はそもそも張好好にはないからである。本劇の主題は張好好との団円では元来ないのであり、最終幕に付された団円が物語を終結させるための方便であることはいうまでもない。

では、「揚州夢」の主題はどこにあるのだろう。本劇は、全体を物語としてみた場合、ストーリー上の展開がほとんどない芝居である。楔子で出会い、第一折で再会し、第二折と第三折では思慕を募らせる。その間、杜牧は一貫して宴席にあり、次のような歌をうたうばかりである。

> 【那吒令】倒金鉼鳳頭。捧瓊漿玉甌。蹴金蓮鳳頭。並凌波玉鉤。整金釵鳳頭。露春纖玉手。天有情天亦老。春有意春須瘦。雲無心雲也生愁[9]。
> 【鵲踏枝】花比他不風流。玉比他不溫柔。端的是鶯也銷魂。燕也含羞。蜂與蝶花間四友。呆答孩都歇在荳蔻稍頭[10]。
> 【那吒令】鳳の飾りが付いた金の鉼を傾け、うま酒の入った玉の甌を捧げもつ。鳳の飾りの付いた小さな金蓮の鞋を履き、玉の鉤のようにカーブした鞋を歩ませる。鳳の飾りの付いた金の釵を整えるため。美しく白い玉のかいなを覗かせる。天に心があれば天も老いるだろう。春に心があれば春も痩せるだろう。雲に心があれば雲も愁をいだくだろう。
> 【鵲踏枝】本物の花など彼女に比べれば色あせる。本物の玉など彼女に比べればかたすぎる。まこと、鶯の魂も消え入り。燕もはにかむばかり。蜂と蝶とは花間の四友。ただぼんやりと、花も恥らう若い荳蔻の梢にしばしやすらう。

右は、第一折において、成長した張好好を杜牧が見初めるシーンである。

また、第三折では彼女を回想して次のように歌う。

【感皇恩】濃粧呵嬌滴滴擎露山茶。淡粧呵顫巍巍帶雨梨花。齊臻臻齒排犀。曲灣灣眉掃黛。高聳聳髻堆鴉。香馥馥冰肌勝雪。喜孜孜醉臉烘霞。端詳著庞兒俊、思量著口兒甜。怎肯教意兒差。

【感皇恩】濃く化粧をすれば滴る色気は露を置いた山茶花のよう。淡く化粧をすれば雨を帯びてふるえる梨花のよう。整然とした歯は犀のつのを並べたよう。美しいカーブを描き黛は引かれる。高々と黒髪の髷は結われ、かぐわしい雪の肌は透き通る。ほんのりと酒は朝焼けの紅を引く。粋なかんばせに見とれ、巧みな言葉を思うばかり。気に入らぬところなどあろうはずもない。

つまり、「揚州夢」は張好好に対する杜牧の恋慕を繰り返してうたうばかりなのである。楔子で出会い、第四折で六年後に団円するまで、目立った物語展開がほとんどない中、杜牧は文人としての志と張好好への思慕を歌い続ける。これを「妓女ものの類型」の中で考えた場合、本劇の特徴を次のように要約することが可能なのではあるまいか。すなわち、「妓女ものの類型」においては、書生は必ず科挙に応じ、出世して妓女を迎えに帰ってこなければならない。だが本劇は、その重要な設定を欠いており、杜牧は初めから「翰林侍読」である。これは、恐らく「官僚の恋」を描くための設定ではない。杜牧の韜晦が全編にわたって点描されるように、むしろ「出世する機会を奪われた書生の恋愛」の変形というべきだろう。つまり、「揚州夢」における杜牧は「すでに出世している」のではなく、「もう出世する見込みはない」のである。

たとえば、本劇第三折に白文礼なる人物が登場し杜牧をもてなすが、この人物は「頗有幾貫資財、人順口以員外呼之」[11]とみずから言うように、金持ちの商人として設定されている。杜牧をもてなして話を聞くだけの端

役なら、他の「妓女もの」がそうするように「官僚」を登場させればすむはずだが、それを「員外」である富裕な商人に設定するのは恐らく理由がある。「妓女ものの類型」でいえば「金持ちの商人」は書生の「恋敵」である。ところが、本劇ではその「恋敵」が団円の仲人になる。この点にこそ本劇の重要なパロディー性があるのではあるまいか。

この恋敵に向かって杜牧は次のように歌う。

【採茶歌】非是我自矜誇。則為咱兩情嘉。準備著天長地久享榮華。（白文禮云）相公放心。小生務要與相公成就了這樁事。（末唱）今日箇既得朝雲行暮雨、久以後何須流水泛桃花[12]。

【採茶歌】うぬぼれるわけではないが、あちらも私を憎からず思うゆえ、この世が果てるまで栄耀栄華を共にしようというわけじゃ。（白文礼のセリフ）安心めされい。旦那様のために、事を成就して見せましょう。（正末のうた）いま、朝の雲・夕べの雨が成就するからは、桃の花を流水に託して思いを伝えた故事は使うまい。

張好好も杜牧に寄り添うことを望んでおり、白文礼がうまく執り成してくれれば、思いをはせるしかない現実を変えられる、という。本劇の杜牧には、恋を成就させようという気概も能力もない。あるのは下のうたのような酔態と夢想だけといえよう。

【脱布衫】不覺的困騰騰醉眼朦朧。空對著明晃晃燭影搖紅。這其間在何處殘月曉風。知他是宿誰家枕鴛衾鳳。

【小梁州】這些時陡恁春寒繡被空。冷清清褥隱芙蓉。……

【脱布衫】（張好好の夢から覚めて）はからずも、うつらうつらと酔眼は朦朧として、あかあかと長い影を落とす灯火に向かい合うのみ。今このとき、暁の風ふく残月のなか、我が夢から去ったあの人はどこにい

るものやら。鴛鴦の枕・鳳の褥を誰と共にしているのだろう。
【小梁州】今このとき、春の寒気が俄かに、私の空の褥にしのびより、ひんやりと、芙蓉のかんばせを消し去った。‥‥

「妓女もの」の通例でいえば、書生には金がないから結ばれず、出世を求めて書生は旅立ち、妓女が一人で風雪に耐える。だがそれは、書生に出世する可能性があるからこそ成立する物語なのであって、その可能性がなければ物語ははじめから動きもしない。本劇は、その意味では「類型」の裏返しなのであり、物語はただ書生の夢想の中ではじまって終結するだけなのである。この意味で「揚州夢」は、「妓女もの」のパロディーになっているといえるだろう。

結語

「揚州夢」は文人の恋を描いた作品であるが、本質的には、「妓女もの」のパロディーとして発想されているように思われる。

吉川幸次郎氏はかつて、『喬夢符小令』に歌妓の名が多く見いだせることから、喬吉を教坊になじみの多い風流人であると推測し、また、喬吉の散曲には賈侯、紹興于侯、雅斎元帥、万戸といった高官・大官への言及も目立つことから、彼が大官の一種の食客だったと推測した[13]。この推測に異議をとなえる人は恐らくあるまい。喬吉の「自述」と題する散曲は次のように言う。

【綠幺遍】不占龍頭選。不入名賢傳。時時酒聖、處處詩禪。煙霞状元。江湖醉仙。笑談便是編修院。留連。批風切月四十年。
科挙に合格することもなく、名賢伝に入れられることもなく、その時時に酒聖と称えられ、場所場所で詩禅と呼ばれ、煙霞の状元、江湖の

酔仙として、友と在野で翰林の編修官のように議論して、ぐずぐずと、風流三昧に四十年。

このほかに、「州判の文従周の維揚より來るに會す。楚儀李氏の意を道(い)う」と題される散曲もあり、そこでは「揚州夢」とも関連する次のような内容が歌われる。なお、「楚儀李氏」とは李楚儀という歌妓を指し、『青楼集』[14]によれば維揚の名妓だったという(『青楼集』は李芝儀とする)。「州判の文従周の維揚より來るに會す。楚儀李氏の意を道(い)う」とは、喬吉が李楚儀の代筆をする形で州判の文従周と李楚儀の仲をからかったものと思われる。

【折桂令】文章杜牧風流。照夜花燈、載月蘭舟。老我江湖、少年談笑、薄倖名留。贈楊柳人初病酒。采芙蓉客已驚秋。醉夢悠悠。雁到南樓、寄點新愁。

(文従周は)文章は杜牧にも比すべき風流人。灯火をともして花の夜をともにし、月を蘭舟に載せて楽しみましたわね。あたしを江湖にほったらかし、あなたは歳若い芸者とお楽しみ、浮気者の浮名を流す。あなたに別れの楊柳を贈ったあたしは、悲しさにお酒ばかり。芙蓉を摘んだあなたはそそくさと秋の旅支度。夢にあなたを追い、雁は南楼を過ぎて、悲しみをますばかり。

こうした散曲を見るならば、文人と妓女の恋を描く「揚州夢」には、作者喬吉の実生活・現実が何がしか投影されていると見ることも不可能でないかもしれない。志をいだきながらも酒色に溺れる「揚州夢」の杜牧、「翰林侍読」でありながら出世の道のない杜牧には、大官の食客として生きたであろう喬吉自身の姿が重ねられていると見ることができるだろう。「揚州夢」はそうした「文人臭」をたたえているのであり、少なくとも明代の

文人たちはその味わいを愛したのである。

だが、本稿が重要だと見なすのは「揚州夢」の「文人臭」ではない。元雑劇は旺盛な創作意欲を発揮し、中国の戯曲・小説史上重要なさまざまな「物語類型」を完成させた。だが、同時に元雑劇は「物語類型」を完成させたばかりではなく、それを破壊してパロディーに仕立てるエネルギーも有していた。「妓女もの」についていえば、「販茶船」が登場して「妓女ものの類型」を完成させたことは重要な事件であったろうが、喬吉が同じ「販茶船」をもとに、それを「出世する当てのない男の夢想」に変えてしまったのである。ある意味で「揚州夢」は「販茶船」の子孫であり、パロディー精神という元曲特有のエネルギーから生まれたものと言えるのではないだろうか。

注

1)『改定元賢伝奇』、明・嘉靖年間、李開先編刊。もとは十六巻であるが、散佚があり、現在残るのは六巻のみ。『文淵閣四庫全書』に収録される。

2)『李中麓閒居集』五「喬夢符小令序」に「夢符不但長於小令、而八雑劇數十散套、可高出一世。予特取其小令刻之、……套詞又不忍輕去、間亦選而取之、附於其後、不改小令原名、以小令多而套詞少耳」とあることから、李開先が喬吉の作品を刊行したことが分かる。また、現在『喬夢符小令』は明・隆慶刊本と清・厲顎刊本が存する。

3)『改定元賢伝奇』『古名家雑劇』『元曲選』に収録される。白居易と琵琶の演奏に優れた妓女との恋愛を描いた作品。雑劇の中では白居易が妓女のために「琵琶行」を作ったとされている。雑劇の物語に合わせて、原作の「琵琶行」の詩句が部分的に引用されている。

4)「錦橙漿」は、元・劉郁『西使記』に「以橙漿和糖爲飮」とある。「橙漿」とは西域の飲み物だが、酒ではない。しかし、本曲においては「錦橙漿」を以て「酒」を指していることは明らかである。喬吉はこの言葉を異国情緒をかもすものとして使ったのであろう。

5)『漢語大詞典』は、「挺」を「傑出、突出」といい、「儁」を「俊俏、漂亮」という。『継志斎』本はこの二句を「打疊起國子監的酸拽扎起翰林院的儁」

に作る。

6)「村酒透瓶香」は元曲に散見される成語。

7)『継志斎』本はこの一句を「也強似假惺惺真出醜」に作る。

8)「子弟收心」は遊び人が廓から足を洗うことをいい、元曲の重要な主題の一つ。

9)『継志斎』はこの二句を「春有恨春先瘦山有眉山也顰愁」に作る。

10)「呆答孩」は、「呆答頦」「呆打頦」とも書く。「答孩」は「呆」の反切字。ぼんやり、ぼうっとするさま。

11)「員外」は、もともと「正員」以外の官員を指す言葉であるが、金銭でその職位を買うこともできた。そのため、宋元の時には特に「富人」、「豪紳」を指す。

12)「流水泛桃花」は劉晨阮肇の故事をさすだろうが、「桃花」が手紙代わりに流水に託されるというモチーフから見ると、唐・崔護の物語を指すものとすべきかもしれない。

13) 吉川幸次郎『元曲金銭記』「李太白匹配金銭記」「譯題」参照（筑摩書房、1943 年 5 月）。

14)『青楼集』は、当時の妓女に関わる見聞などを集めた書物。その「誌」に、「歌舞之妓有聞而知之者、有見而知之者。雖詳其人、未暇紀錄。追念舊遊、恍然夢境。於心蓋有感焉。因集成編、題曰青樓集。至正己未春三月望日錄此。異日槩觀、以發一笑云」とある。ここでは元・夏伯和著『中国文学参考資料小叢書』第一輯（古典文学出版社、1957 年 7 月）所収のテキストに拠った。

（大学院博士後期課程学生）

摘要

論喬吉《揚州夢》

陳　文輝

中國的小說和戲曲，從故事的進展、登場人物、甚至於故事的內容都表現出一種類型化的傾向。田中謙二氏將中國的戀愛劇分為以《西廂記》和《販茶船》為代表的良家女子的戀愛和妓女的戀愛兩大類。本稿對喬吉的妓女戀愛劇《揚州夢》進行聚焦，考察元雜劇是如何將“故事類型”進行變化，把滑稽諷喻寓意其中的。

《揚州夢》以杜牧的〈張好好詩〉為本事。正如馬致遠利用白居易的〈琵琶行〉創作了妓女戀愛故事《青衫淚》那樣，喬吉亦可以同樣的方式來改寫〈張好好詩〉。但是，《揚州夢》的故事展開看不到歷來妓女戀愛雜劇所有的起伏跌宕。喬吉將描寫的重點放在了男主角杜牧身上。《揚州夢》里的杜牧雖然身居高官，却沉溺酒色、志在方外，與無法出世立身的作者喬吉的境遇是有所關聯的。如此婉曲的將元代知識人的影子寓意到歷來的妓女故事中就是本劇最大的諷喻之處。

キーワード：雜劇，喬吉，揚州夢，妓女物語，パロディー精神